

紅衛兵、知識青年世代が担う狂気の中国外交

平可夫

阿部信行

(訳者コメント)

香港の民主化デモは、中国の内政、外交を象徴する事件となりました。中国を支持したのは、国連事務総長の潘基文でした。いかなる背景があるのかわかりませんが、潘基文は韓国人であり、母国を慮っての発言かもしれません。著者の平可夫氏は、文革時の紅衛兵、知識青年世代はまともな環境で生育していないので、外交は破たんすると述べています。

習近平が国家主席に就任してから 2 年、中国外交は大きく変化した。四方に争いの種を撒き、至る所に敵をつくっている。江澤民及び胡錦濤の時代は、東シナ海、南シナ海油田、中央線の線引き問題等が存在していたとしても、南シナ海及び対日問題に対して、ひとつひとつ問題を解決しようとしていた。しかし中国は、1 年ごとに他国との間で重大な争いを発生させている。

中国は、今年、上半期だけでも 5 月から 6 月にかけて、南シナ海でベトナムと衝突し、放水や船の衝突事件を起こした。同時にフィリピンと争いのある島嶼で珊瑚礁を勝手に埋め立て、東シナ海では日本と戦闘機の異常接近事件を起こし、相互に言い争う状況を作った。6 月には米国の中国批判に対して反論のトーンを高めた。中国はシャングリラ会議において日米の結託を非難し、ペンタゴン編纂の「中国軍事力報告」を全面批判した。同様に 6 月、G7 集団国家は、聯合声明で、名指しは避けたものの初めて中国を批判し、武力をもって南シナ海の現状を改変する一切の行動に重大な関心を持っている、と述べた。中国は、政治、外交上、再びかつての“8 ヶ国連合軍”(注：義和団事件)の時代に陥ろうとしている。

以上は、中国外交の表面に現れた部分だけを述べたものであるが、実際に注目すべきことは、北朝鮮及びミャンマーとの急激な関係悪化である。同様に 6 月、北朝鮮労働党は、党内通知方式で、“党員は中国に対する幻想を放棄せよ。中国は悪い隣国であり、米国と同様に我が国を抑制しようとしている”と述べた。中国は、連続して 4 ヶ月間、北朝鮮に対する原油供給を止めた。5 月、北朝鮮は、東部の惠州から北京まで到達する射程 1300KM 以上の中距離弾道ミサイルを発射した。本誌は、これは平壤の中国に対する重大な軍事的威嚇であり、日本や韓国に対するものではないと考えている。

また多難な 6 月に、中国は香港、台湾に直接衝撃を与えた。中国は、香港で“一国二制度白書”を発表した。その中で香港市民に直接脅威を与える“有権実施直

接管理”条項は、大きな問題を引起した。ごく少数の中共の手先のメディアを除き、中立の立場のメディアでさえ、大きな批判の声を上げた。同白書で中国は、北京に対する多数の香港人の不信感の高まりに焦りを感じ、外国勢力の陰謀であると断じた。近年来の北京の対香港政策は、進歩がなく退歩している。また中国の対香港政策は国際的な潮流に符合せず、一般的な人類共通の価値観にも符合していない。これは世界世論が認めるところである。同様にこの6月、北京は、“台湾の将来は13億人の中国人が決定すべきである”と述べた。馬英九政権は直ちに反応し：台湾の強さは当然2300万人の台湾人が自ら決定する、と述べた。如何なる地域においても、将来の命運は、第一にそこに住む人々が自ら決定すべきであることは、人類一般の常識である。

見えにくい部分を見ると、ミャンマーのような国でさえ中国を避けている。近年来、ハイレベルでは如何なる交流も接触もなかった。2年前、本誌記者が、中国とミャンマーの軍事協力関係について、ミャンマー国防部の高級官員に取材した際、彼は冷淡にこのように述べた：ミャンマーの武器市場は東西に開かれている、と。取材全体を通した印象は、“中国”のことは一切口にせず、嫌っているような印象だった。常に他国には干渉しないと宣伝している中国だが、ミャンマーの分離主義武装勢力が持っている武器は中国製の装甲車や火砲である。ミャンマーの人々は、中国を信用できるだろうか？

いかなる国家も、外部世界との問題を解決する場合は、まず第一に四面楚歌を避けるはずだ。たとえどんな問題があろうとも、周囲を全て敵にすることなく、一つ一つ解決の道を探るはずだ。シャングリラ会議において、一斉に拍手された質問に本誌は特に注目した。会議で中国軍事代表団団長が発言した際、インドの学者が九段線の線引き、及び中越の衝突を批判質問した際、一斉に支持する拍手が起きた。

中国側が“中国は漢の時代から2000年間ずっと南シナ海の島礁を支配していた”と述べたとき、会議参加者から“うそつくな”の声が上がった。会議場の席に座っていたのは、大半が海軍軍人、各国国防部、外交部の高級官員、学者である。人類の航海技術はどのように発展してきたのか、海軍軍人は良く知っている。

中国はなぜこのような姿勢を採るのであろうか？現在の習近平外交を縦観すると、次の特徴があることが分かる：

1、軍人の影響力が日増しに増大している。前述した主要な紛争には、南シナ海油田付近に正規の軍艦、爆撃機を出動させた事件、係争中の珊瑚礁を勝手に埋め立てた事件、日本軍用機に異常接近した事件を含め、すべて軍人が関わっている。武力による外交支配の開始、外交のさらなる軍人化である。この点は、戦前の日本に極めてよく似ている。名義上は文人内閣であるが、軍隊がますま

す外交に関与するようになった。この特色は、習近平が過去に行った軍隊への働きかけが原因であると本誌は考える。彼は軍の支持を緊急に必要としているからだ。

中国の対外政策を見ると、北朝鮮の対外政策と極めて似ている所がある。2013年の上半期、本誌は北朝鮮内部の異常を指摘した。軍人による政変が起こった可能性が極めて高い、と。張成澤の出現回数が急激に減少し、好戦的言論が充満した。平壤には偽装車両が出現し、核実験やミサイル発射試験の威嚇を行った。長年の経験から見て、中国や北朝鮮のような国家は、対外姿勢が強硬になればなるほど、内部の危機が処理できなくなっていることを意味する。すなわち弱体化しつつある、と。

2、中国の内政を見よ。この一年間に何が起こったか？党内、軍内闘争の存在は、周永康、徐才厚問題の公表が遅々として進まないことに現れている。党高級幹部を訴追すればするほど、自らの身に降りかかる可能性が極めて高い。漢族と少数民族との対立が過去に見られないほど高まっている。新疆の爆発事件は止むことが無く、ウィグル人の不満は、忍耐の限度を超えた。チベットは不安定で、焼身自殺は絶えることがない。

3、経済成長は減速し、社会の不満は、爆発事件、殺傷事件を引き起している。解決するにはどうするか？当然、対外問題を激化させ、多くの敵を作る。そうすれば内部の不満を転化させることが出来る。

次に、習近平個人の成長過程に対外政策への盲目性を見ることが出来る。彼が主席に就任するずっと前に、本誌はすでに、この世代の指導者を評価していた。彼らの身上には、負の色彩が極めて強く、期待できない、と。紅衛兵、知識青年、工農兵大学生、太子党等々、まともな時代の産物であろうか？

現在は、紅衛兵、知識青年の外交の時代である。それは武力及び非秩序性を崇拝することを意味する。したがってなぜ習近平が、東シナ海防空識別圏設定問題で“要立規矩”（注：規則を作れ）と述べたのか、この思想の基礎を分析することが出来る。

太子党の背景には、傲慢、偏見、自己の力量に対する過信がある。さらに周辺国家に対中聯合を結成させる可能性があり、一旦中国内部の不満分子と呼応するようになると、さらに経済悪化が加わると、中国は危機に陥る。

工農兵大学生の背景は、正しい知識を軽視（中国全体にこのような傾向が強まりつつある）することを意味し、現実の周辺情勢、日本、ベトナムの軍事実力に対し判断を誤るようになる。

軍隊の汚職、腐敗問題を抜きにして、實際上、今日の力量を比較すると、中国軍は”戦備専用茅台酒”？”高級幹部専用パイアグラ”？を使用しているとい

う。(この意味から言えば、習近平就任後、禁酒令を敷いたのは正しい)
一旦日本、ベトナムと戦火を交えると、中国は必ずしも優位ではない。ベトナムと大規模戦争になると、海南島の全ての空母基地、第二核潜水艦基地は、弾道ミサイル、BASTION 陸上発射対艦ミサイル、SU-30MKV 戦闘機の攻撃範囲となる。ベトナムは、領海、領空から攻撃を発動することができる。日本の場合は、一旦戦火を交えると、空中、海上で米軍が必ず介入する。日本人は、戦う前に高級指揮官にバイアグラを服用させたりはしない。”戦備用の御酒”を飲めとは言わない。

ある国、ある人が他の国、他の人と衝突した場合、誰が正しく、誰が間違っているとは言えないことがある。しかしある国、ある人が、歴史の流れの中で、およそ同時に多くの国、多くの人（しかも主流の国家）から批判されたとき、特に大多数の隣国と仲が悪くなった場合、自分に問題があるのではないかと反省してみる必要がある、と本誌は考える。重要なことは、自己の内部に自然に反省するメカニズムが必要であることだ。もしそれがなければ、さらに危険である。

“紅衛兵” 外交は恐ろしいのか？”

“親戚外交” からソ連外交へ

むかし本誌の主幹（平可夫氏）に 1 人の親戚のおばさんがいた。全村で 16 家族が住み、そのうちなんと 14 家族といつも諍いしていた。殴り合いになることもあった。彼女のあだ名は、“母老虎” であった。彼女は確かに酷かった。声が大きく、口げんかの時など、二三人の男女の声など物の数でなく、一気にしゃべりまくり疲れを知らなかった。家庭内では専横であった。自分の夫にはつらく当たり、自分の娘をひどく殴った。他の親戚は彼女を諫めて言った。我慢出来ないのか？こんなことだと他人の尊敬は得られないよ、と。彼女は“私は他人の尊敬などいらない。私は他人を怖がらせたいだけだ” と言った。人々は確かに彼女を怖がっていた。実をいうと、彼女は極端に虚弱であった。

なぜ、他人の尊敬が必要でないのか？なぜ、他人を怖がらせる必要があるのか？少年時代の本誌主幹は深遠な“外交哲学”などは知る由もない。1992 年 2 月、本誌主幹は初めてロシアを訪れ、ロシアの外交学者とソ連時代の外交政策を研究した。この学者は：当時のソ連共産党の外交政策の基本は、“もし西側の尊敬を得られないならば、彼らを怖がらせる” ことにあったと述べた。主幹は叫んだ、なんと“親戚外交” とソ連外交は同じだった、と。しかもソ連外交は成功した。確かにソ連は、周辺国と西側を怖がらせた。

これを基本にして習近平は外交を行おうとしているのだろうか？成功するのだろうか？問題は、現在誰も中国を怖がっていないことだ。フィリピンでさえ、中国漁民を審判にかけようとしている。平可夫の上述した親戚のおばさんは、小

学校教育しか受けていない。

以上